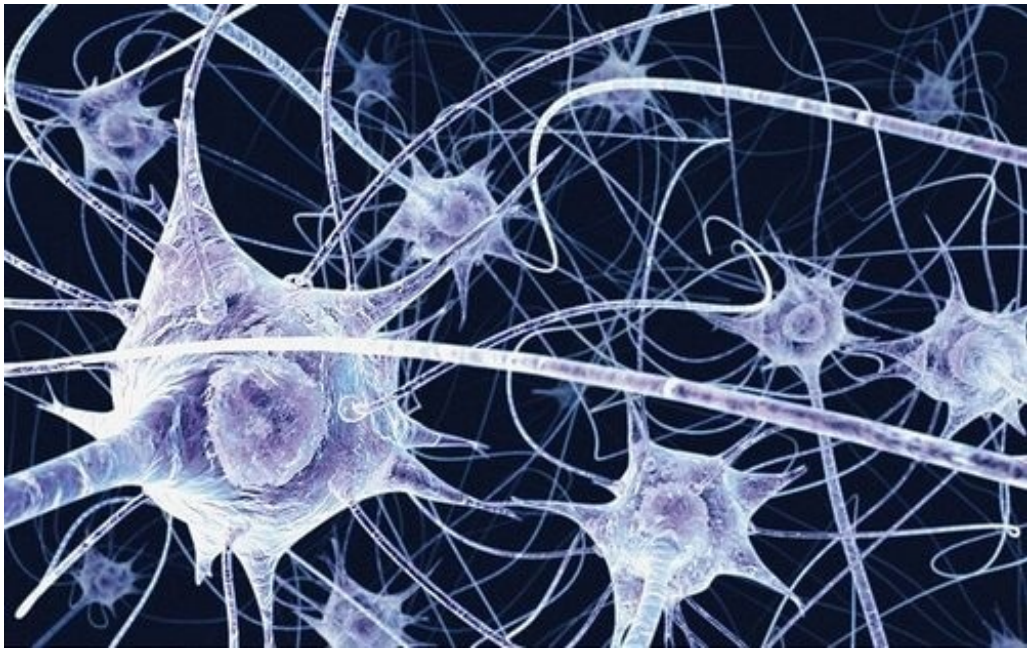


Warau Nouzui

喰う脳髓



嗤う脳髄 (Warau Nouzui)

「処刑しろ！」

両腕を押さえつけられ無理矢理ひざまずかされた虜囚に、その男は嗤いながら言った。

「そ、そんな！ 捕虜協定違反じゃないか！」

叫ぶ虜囚を容赦なく二人の兵が引きずっていく。

「この独裁者めっ！ 地獄に落ちやがれっ！」

呪いの言葉を残し、虜囚は扉の外に消えていった。

「私に逆らうことは一切許さない。私が法であり正義であり真理なのだ。フッフ……」

その男は悪名高いK国の独裁者だった。

敵国の虜囚のみならず、時には自分の右腕とも言える有能な政治局員でさえ処刑の対象とした。

その処刑理由は至極単純で、彼の気分の問題だった。

この月もすでに数十人がその狂気の犠牲となっていた。

「次の容疑者を連れて来い」

独裁者が命じると、後ろ手に縛られて二名の兵に両脇を抱えられた肥満気味の男が、うな垂れながら現れた。どうやらすでに拷問を受けた後らしかった。

「こいつの容疑は？」

「はい。最も重い罪であります」

容疑者を抑える二名の兵が、革靴の踵をピシャリと揃え姿勢を正す。

「なんだと？ 顔を見せろ」

兵の一人が容疑者の髪を掴んでグイと引き上げる。

「うっ、お前は……」

独裁者は少し狼狽した様子だった。

「影武者であります」

髪を掴む兵が容疑者を一步前に押し出す。

「偉大な指導者さまを、こともあろうに人前で侮辱しておりました」

「侮辱だと？ いったいどのような？」

「はっ！ 偉大な指導者さまの影武者という重要な任務につきながら、酒に酔って腹に顔を描いて踊っておりました。しかも指導者さまの御名を語って、下級兵士の前にてであります」

「なんだと？！」

独裁者は容疑者に歩み寄ると、その顔をじっと覗き込んだ。

「……！」

一瞬、独裁者の顔から血の気が失せたように見えた。

「……よし、では、私が直々に取り調べるとしよう。お前たちは下がってよい」

「し、しかし、容疑者と指導者さまだけにするわけには……」

「聞こえなかったのか？ もっと良く聞こえるようにしてやろうか？」

独裁者は拳銃を手に取り、兵の耳に押し当てた。

「い、いえ……」

驚怖の色を目に浮かべた兵たちは容疑者を突き放すと、二つの踵を鳴らして敬礼し、その部屋から出て行った。

「大丈夫でございますか？」

「ああ……」

「なぜこのような」

独裁者は影武者に問いかけた。

「聞くな」

「お酒は少々お控えになった方がよろしいかと存じますが」

「うるさい！ あの二人の兵士は後で処刑しろ！」

「……仰せのままに」

どうやらこの二人、実は立場が逆だったようである。

酒癖の悪い本物が影武者と間違えて捕らえられ、影武者が独裁者の仕事をこなしているところに連行されてきたというわけだ。

「酒を持ってこい！」

「傷に障りますゆえ……」

「お前、命令だぞ！ 酒をもってこい！」

「……かしこまりました」

影武者は姿勢を正し敬礼すると、奥の部屋へと消えて行った。

しばらくすると、盆にブランデーのボトルとグラス、氷のポットを載せて戻って来た。

影武者がグラスに氷を入れ始めると、独裁者はブランデーのボトルを乱暴に奪い取り、そのままラッパ飲みし始めた。

「あっ」

影武者は相手の傷だらけの身体を気遣うが、当の本人はまったく気にもせず、口角から漏れ出した酒を手の甲で拭った。

「おい、お前」

「は、なんでございましょう？」

「踊りが見たいか？」

「踊り……ですか？」

「ああ、腹踊りだ。日本で覚えてきた本場モノだぞ」

「いえ、それは……」

「遠慮するな。ほら、踊るぞ」

いきなり独裁者は服を脱ぎ出した。その腹には、下級兵士の前で踊った時のまま、おかしい顔が描かれていた。

「ほら、どうだ？ こうすると顔の表情が変わるのだぞ」

そう言って独裁者は腹をうねらせ踊り始める。

「どうだ？ 面白かったら笑っていいんだぞ」

「は、はい……」

あまりの情けなさに影武者は失笑するばかり。

「おい、お前まさか面白くないのか？ ミンチにして家畜の餌にしてやってもいいんだぞ！」

「い、いえ、そのようなことは……。大変に面白おかしくございます」

「そうか、ならば笑え！」

「はい……ハ……ハハ……」

「ほれ、これでどうだ？ ほら、笑え！」

メタボの三段腹が波打つと、そこに描かれた顔が妙ちきりんな表情をつくり出す。

「ハハ……ハハハ……ハハハハ！」

笑わなければ殺される。

乾いた笑いが延々と続く。

それは影武者にとって、まさに悪夢だったに違いない。

「博士、ナンバー９９が、どうやら笑っているようです」

波形が刻々と描かれ続けるモニターをチェックしながら、白衣の若い男がシートに数値を記録する。

「うむ、そのようだな」

博士と呼ばれた白髪の子は、モニターから視線を離すと背後の壁を振り返った。

壁の手前には硝子の筒が数えきれないほど並んでいて、それぞれが透明な液体で満たされていた。

ポコポコと底から湧き出す泡の列が、その中に浮かぶ灰白色の脳髄を避けるようにして天辺まで昇っていく。

「えーと、たしかナンバー９９って……。ああ、やっぱり。これって例の、一ヶ月前にクーデターによって殺されたK国の独裁者の脳髄ですね」

助手と思しき若い男は、ナンバー９９の筒に歩み寄るとボールペンの背でコンコンと叩いた。

「ああ、あの殺人鬼か。おおかた夢の中で殺戮でも楽しんでいるのだろうさ」

博士は瞳に侮蔑の光を宿すと、血色の悪い頬に薄ら嗤いを浮かべた。

「あれ？ 博士、これを見てください」

再びモニターの前に戻った助手が、流れて行く波形の一部をボールペンの先で指し示していた。

「おや、これは驚怖を感じているのか？ 一体、どういうことだ？ 笑いながら驚怖を感じるとは？」

「さあ……」

二人とも首を捻った。

その直後、ナンバー９９の筒に浮かんだ脳髄が「ぷるる」と嗤い、モニターに殺意の波形を映し出した。

『嗤う脳髄』

～ 完 ～